



健やか豆知識

第24回

Q. 日本人の子どもが熱性けいれんを起こす割合は？ (参考: 欧米での発生率 2~5%)

- Ⅰ 0.1~1% Ⅱ 7~11% Ⅲ 15~20%



高田製薬は、患者さんや医療関係者の声に耳を傾け、医療ニーズに合った医薬品の開発と情報提供で、健康な社会づくりに貢献します。

— 人びとの健康を願って —
高田製薬株式会社

熱性けいれんは、慌てず落ち着いて対応しましょう

熱性けいれんは、生後6カ月ぐらいから5歳ぐらいの子どもにみられる、発熱時に起こるけいれん発作(ひきつけ)です。日本人は海外の人に比べ熱性けいれんを起こしやすいといわれており、7~11%の子どもが経験します。とくに1歳過ぎの子どもによくみられますが、成長とともに起こらなくなります。

熱性けいれんは、38℃以上の発熱時に出現し、発熱から24時間以内に生じることが多く、突然、白目をむく、全身を突っ張る、手足をガクガクと震わせるなどの症状がみられます。けいれんを起こした時は慌てず落ち着いて、平らな場所に横向きに寝かせてあげましょう(嘔吐による誤嚥を防ぐため)。昔は舌を噛んでしまうからと、口にタオルを入れたり割り箸を噛ませたりすることがありましたが、このような対応は呼吸をしづらくさせてしまうので、口の中にものを入れないでください。窮屈な服装の場合はボタンやベルトを緩めて呼吸を楽にしてあげましょう。そのほか、その後の診察にそなえて、けいれんの様子(左右の動きの違い)や持続時間を確認しておきましょう。可能であれば動画で撮影しておく診察時に役立ちます。熱性けいれん後は、しばらく寝てしまう子どももいますが、目が覚めた後に意識がしっかりしているかを確認し、症状が起こった時の体温を計っておきましょう。

ほとんどは2~3分でおさまりますが、5分経ってもおさまる様子がない場合は、インフルエンザ脳症や髄膜炎などの病気も疑われるため、直ちに救急車を呼んでください。

初めて子どもが熱性けいれんを起こしたら、とても不安なものですよね。ほかの病気が隠れていないかを確認するためにも、一度、医療機関を受診しましょう。

監修 後藤 知英 神奈川県立こども医療センター 神経内科部長

< Ⅱ 掘玉 > さらに詳しい情報はホームページで!



⇒さらに詳しい情報は「クイズ解説」をご覧ください。